

CURES

NEWSLETTER

地域経済
ニュースレター

1997. 3. 25 No.41

巻頭言

“時間”というもの

西 端 敏

経営工学の手法の一つに時間研究がある。テイラー (F.W.Taylor) 以来の古典的とも云える手法である。時間を測定することなど、時計を持っていさえすれば誰でもできる。したがってこの技術には余り敬意を払って貰えない。いや、敬意どころか、むしろ敵意をもって迎えられる事が多い。好印象を持たれない理由は分らないでもない。仕事をやっている最中に、ストップウォッチを持った男が、押し黙ったまま、背後から観察し測定するなど、やられる方からすれば余り気持ちの良いものではない。チャップリンの「モダンタイム

ス」は人間のロボット化をカリカチュアライズしたものだが、この背後にも時間研究の存在が感ぜられ、それが反感を増幅するのに力となったように思う。

私自身、時間研究は後学で自己流に学んだに過ぎない。最初、この手法自体に余り価値があるとも思えず、やや軽んじていたことは否めない。しかし、「管理」の問題に深く関わって行くにつれて、好むと好まざるとに拘らず「計画」「実施」「チェック」といった管理の基本的サイクルに、「時間」測定が不可欠だということが分ってきた。

- 巻頭言 西 端 敏
- CURES Report
 - 「21世紀の都市経済 — ボローニャの可能性 —」 ヴィットリオ・カベッキ
- 地域経済文献情報

金沢大学経済学部

確かに、「管理」意識の有無、地位の上下に関わりなく（むしろ人を使うべき立場にある、上位の者ほど）如何に時間を有効に使うかに腐心しており、「24時間をどう使う」といった本が数多く書かれ、読まれていることをわれわれは知っている。

時間研究の一つに「稼働分析」がある。これは、作業員1人に観測者1人がつき観測し、1日（休憩時間を除く労働時間）の中のカテゴリー別時間配分を調べるのである。長時間作業や、やや管理の手薄で問題のある職場に適用すると、手法自体は極めて単純なものだが、予想外に面白い結果がでる。観測には事前に組合とも話し合い、観測対象者にも了解をとって納得の上で望む。その際、通常のペースで働くこと、観測の目的は作業員の勤怠を見るものではないことを納得して貰う。分析する立場で重要なのは、観測値に問題ありとすれば、それは作業員の所為ではなくて、作業システムを作ったマネジメントのためだということを経験して貰うのである。しかし、観測第1日目は緊張もあって、手洗いに行く回数が1回は減るという。

毎年、講義の一環として「生活時間研究」を課している。目的は、「作業測定」を学ぶため、こちらは飽くまでムダを省き、効率的に作業を遂行するための手法である。これに対して、生活時間の方は、生活全般が対象だから、何がムダか、と問われると返答に窮する。「人生の目的は何か」を問われているのと同じだからである。したがって、分析した結果も多種多様である。面白いのは、学生の殆どが自分の生活を反省することである。いかに勉強していないか、TVばかり見ているとか、内容は各人各様だ。

ただ、数年間やった結果、学生たちの行動様式の変化に驚かされる。無論、高々40人の、

それも経済学部3年が中心なので、サンプルとしては偏りがあるが、現在の大学のシステムが適合しているかどうか考えさせられる。

収入生活時間、生理的生活時間、余暇的生活時間…などなど、観測した細分類の時間をどのようなカテゴリーで括るかが問題だが、家事を一切しないという学生が男女を問わず増えていること、朝食を取らない学生、勉強とは講義に出席することで、予習復習が一切ない学生、アルバイトに社会人と同じ位時間を使っている学生など。

わたし自身の時間も考えてみれば残り少ない。金沢大学で16年間を過したが、前任校での14年と比べると短かったという印象なのは何故だろうか。年をとるにつれて時間は短く感ずると云うからその所為なのか、それともさぼっていたからか、そうすると内心忸怩たるものがあるが、だからといって、時間分析の鬼となって徹底的に自己管理しようという気はない。出来そうもないし、分析のカテゴリーが変わると結論が変わることを知っているからでもある。

ミヒャエル・エンデの「モモ」に、灰色の紳士、実は時間貯蓄銀行の外交員、XYQ/384/b氏が、理髪師のフージーの時間の無駄を次々とあげ加入を迫るところがある。フージーは説得されてしまうのだが、少なくとも今の私にはこの貯蓄銀行に加入する気はない。といって、時間を“無駄”にはしたくない。だが、何がムダで何がムダでないのか、基準自体ゆれ動いている今、結論はつけないうまま、“適当”にムダを省きつつやって行くという冴えない結論となった。

（金沢大学経済学部教授）